



TITLE:

ワークライフバランスに関するK大学看護学生の意識調査

AUTHOR(S):

竹川, 那奈世; 大倉, 美佳; 桂, 敏樹; 臼井, 香苗

CITATION:

竹川, 那奈世 ...[et al]. ワークライフバランスに関するK大学看護学生の意識調査. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 : 健康科学 : health science 2012, 7: 1-8

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155987>

RIGHT:

原 著

ワークライフバランスに関するK大学看護学生の意識調査

竹川那奈世*, 大倉 美佳**, 桂 敏樹**, 臼井 香苗**

Nursing Students' Attitudes for Work-Life Balance : A Survey in K University

Nanase TAKEGAWA*, Mika OKURA**, Toshiki KATSURA** and Kanae USUI**

Abstract : Aim : This study aimed to clarify how nursing students view their work-life balance and career development.

Methods : Two hundred and seventy nine nursing students were asked to answer the questionnaires that we modified to study their own work-life balance based on our previous research.

Results and Conclusion : Two hundred and twenty valid responses (78.8%) were analyzed to study the gender-specific attitudes for work-life balance awareness. Male students showed greater interests in work-related issues, while most of female students showed greater interests in the work when they are required to play an additional role in the future. With regard to the work while raising pre-schools children, about half of female students were already aware of the M-shaped work-life pattern and were willing to return to work after caring for their children. Thus, our survey results suggest that it is necessary to improve back-to-work support for potential nursing staffs who are willing to return to work and to establish a system supporting a wide range of working patterns matching the work-life balance of individual workers in order to secure the number of nursing staffs.

Key words : Work-life balance, Nursing student, Career life course

はじめに

「ワークライフバランス（仕事と生活の調和）」とは、老若男女誰もが、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自ら希望するバランスで展開できる状態である。このことは、「仕事の充実」と「仕事以外の生活の充実」の好循環をもたらし、多様性に富んだ活力ある社会を創出する基盤として極めて重要であるとされている¹⁾。ワークライフバランスの実現に当たって重要なのは、個人のライフステージに応じて様々な可能性を自ら選択できること、柔軟な働き方（個人の様々な事情に合わせた就業環境）とそれを可能にするための支援体制の整備である。グローバル化の進展や核家族化などにより、人々のライフスタイルが多様化するとともに、価値観も物の豊かさよりも心の豊かさを重視し、一人ひとり

の個性を尊重する傾向にあることから、ワークライフバランスは重要な課題であると考えられる。

その中でも特に、ワークライフバランスの実現が困難であると考えられる看護職員について言及する。現在、わが国では約130万人の看護職（保健師、助産師、看護師、准看護師）が就業している。その一方で、推計約65万人の看護職が免許を持ちながら看護の仕事から離れている。これらの状況に対して、再就業の促進や院内保育等にとどまり、国としての本格的な対策はいまだに実施されていない²⁾。

看護職や潜在看護職を対象に行った調査から、「働いていく上での悩み・不安」、「離職を考えたことの悩み・不安」、「潜在看護職員の離職理由」などが明らかになっており、看護職の確保と定着への対策が必要とされている。

潜在看護師を見いだすのも重要な課題であるが、同時に現在働いている看護職者や新卒看護職の定着と育成が重要な人材確保対策であるといわれている³⁾。2009年に行われた調査の結果、新卒就業者と再就業者の合計は離職者を上回っており看護職員就業者数は年々増加していることがわかった。それにも関わらず看護職員は不足しており、2011年の看護職員需給見通しでは約5万9,000人⁴⁾不足すると想定されている。

仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）を

* 財団法人田附興風会医学研究所北野病院
〒530-0025 大阪市北区扇町2-4-20
Kitano Hospital

** 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
Department of Human Health Sciences, Kyoto University
Graduate School of Medicine

受稿日 2011年11月2日

受理日 2012年2月23日

実現し働き続ける看護師が増えることは、医療施設における看護師の人材確保・定着につながり、また看護職の専門性の向上を促進し、看護サービスの向上が可能となる。さらに、看護職員として働いていく中で、各自が希望する形で各々のバランスを決められることが重要である。すなわち、看護職がワークライフバランスをはかり、長く働き続けられるようになるためには、働き方の柔軟性が求められている。

看護師不足が社会問題となっている現在、卒業後看護職に就くと考えられる看護学生がどのような意識をもち、将来について選択していこうと考えているのかを明らかにすることは重要であり、強い関心もたれている。その一方で、女性看護師が育児と仕事を両立していくことは容易ではなく、仕事から離れざるを得ない場合も少なくない。

そこで、本研究は現在の看護学生のワークライフバランスおよびキャリア形成に対する考え方を把握し、これからの看護職勤務環境の整備、ワークライフバランスの実現に役立てていくことを目的とした。

方 法

1. 対 象

K大学医学部看護学専攻1～4回生の学生279人を対象とした。

2. 調査期間・調査方法

2010年10月1～30日において、自作の質問紙調査票を授業終了後の時間などを利用し、直接配布・回収した。

3. 調査項目

先行研究「ワークライフバランス（仕事と家庭の調和）に関する本学医学部学生の意識調査」⁵⁾の質問項目を参考に、K大学看護学生に適した表現に質問項目を修正した。主な質問内容は、①将来従事したいと思っている職業、②希望する進路における現在の従事者に対して聞いてみたい事、③具体的な自分の将来像、④女性が仕事を続けていくために最も必要なもの、⑤将来子どもを持ちたいかどうかの意思、⑥小学校就学前の子どもがいる場合の仕事の形態、⑦中学生以上の子どものいる場合の仕事を希望する機関とした。なお、②希望する進路における現在の従事者に対

して聞いてみたい事は、多肢複数回答形式とし、それ以外は多肢単一回答形式とした。また、⑥小学校就学前の子どもがいる場合の仕事の形態および⑦中学生以上の子どものいる場合の仕事を希望する機関の質問については、⑤将来子どもを持ちたいかどうかの意思の質問について「子どもを持ちたい」と回答した者のみに回答を求めた。

ワークライフバランスを研究の主旨とするため、「仕事」と「それ以外の時間」との違いがわかりやすいように質問項目を設定した。また、「プライベート」と「結婚・出産・育児」の意味に違いをもたせられるような質問項目を設定した。

事前に対象と類似した他大学看護学生2名に対してプレテストを実施し、回答時間および質問項目の適切性を十分に検討した上でアンケートを実施した。

4. 分析方法

SPSS ver. 18 for windows を使用し、基本属性別にワークライフバランスの各質問項目について、 χ^2 検定および Fisher's exact test を用いて検定を行った。また、将来子どもを持ちたいと思うか」の3区分の項目については、Kruskal Wallis の検定を行った。

所属回数については、「実習を全て終え、就職（進学）に向けて活動中あるいは活動を終えている人（4回生）」と「それ以外（1～3回生）」を、大学卒業後に希望する進路については、「医療系（看護師・助産師・保健師）」と「非医療系（それ以外）」と2値化して検定を行った。さらに、卒業後の進路（1＝医療系、0＝非医療系）を従属変数とし、所属回生（連続変数）、年齢（連続変数）、性別（1＝男性、0＝女性）を独立変数として強制投入し、多変量解析として、ロジステック回帰分析を行った。

5. 倫理的配慮

依頼文を用い、口頭で説明を行いアンケートの趣旨を理解していただいた上で、アンケートへの回答は本人の自由意思とした。回答しない場合にも不利益が生じないこと、個人情報・プライバシーの保護に配慮すること、匿名性は保持されること、本卒業研究以外に使用することはないことを伝えた上でアンケートへの協力を得た。

表1 基本属性

		人 (%)		
		合計 n = 220 (100.0)	男 n = 19 (8.6)	女 n = 201 (91.4)
所属	1 回生	60 (27.3)	5 (26.3)	55 (27.4)
	2 回生	53 (24.1)	6 (31.6)	47 (23.4)
	3 回生	57 (25.9)	5 (26.3)	52 (25.9)
	4 回生	50 (22.7)	3 (15.8)	47 (23.4)

結 果

K大学に在籍する全看護学学生279人中、260人に質問用紙を配布し229人（88.1％）の回答が得られた。

集計した結果、「結婚している」に対する回答者が1名、「子どもがいる」に対する回答者が1名という結果が得られた。また、学生の年齢についても18～64歳と大きくばらつきがみられ、現在に至るまでの学歴や

表2 性別にみるワークライフバランスに対する意識差

		人（％）			
		合計 n = 220	性 別		p
			男 n = 19	女 n = 201	
卒業後進路 ¹⁾	医療系	160 (72.7)	12 (63.2)	148 (73.6)	0.372
	非医療系	60 (27.3)	7 (36.8)	53 (26.4)	
希望する進路における現在の従事者に対して聞いてみたいこと ²⁾	体力的問題	36 (16.4)	3 (15.8)	33 (16.4)	1.000
	労働時間・休暇	115 (52.3)	9 (47.4)	106 (52.7)	0.654
	収 入	61 (27.7)	10 (52.6)	51 (25.4)	0.011
	人間関係	62 (28.2)	4 (21.1)	58 (28.9)	0.598
	結婚・出産・育児	88 (40.0)	3 (15.8)	85 (42.3)	0.027
	仕事とプライベート	53 (24.1)	3 (15.8)	50 (24.9)	0.574
	昇進の機会	13 (5.9)	4 (21.1)	9 (4.5)	0.017
	その他	7 (3.2)	0 (0.0)	7 (3.5)	—
	具体的な自分の将来像 ¹⁾	できる限りキャリアを追求し、役職を得る	35 (15.9)	4 (21.1)	31 (15.4)
地域に貢献し社会的活動のリーダーとして活躍する		17 (7.7)	2 (10.5)	15 (7.5)	0.647
仕事とプライベートの両方を大切にする		134 (60.9)	8 (42.1)	126 (62.7)	0.079
プライベートを最優先する		23 (10.5)	3 (15.8)	20 (10.0)	0.429
その他		3 (1.4)	0 (0.0)	3 (1.5)	—
無記入		8 (17.6)	2 (10.5)	6 (3.0)	—
女性が仕事を続けていくために最も必要なもの ¹⁾	育児環境	44 (20.0)	3 (15.8)	41 (20.4)	0.771
	職場環境	65 (29.5)	6 (31.6)	59 (29.4)	0.839
	福利厚生の実	34 (15.5)	5 (26.3)	29 (14.4)	0.185
	配偶者の理解	58 (26.4)	1 (5.3)	57 (28.4)	0.029
	自分の意思	11 (5.0)	2 (10.5)	9 (4.5)	0.243
	その他	3 (1.4)	0 (0.0)	3 (1.5)	—
	無記入	5 (2.3)	2 (10.5)	3 (1.5)	—
将来子どもを持ちたいと思うか ³⁾	持ちたい	187 (85.0)	12 (63.2)	175 (87.1)	0.005
	持ちたくない	5 (2.3)	1 (5.3)	4 (2.0)	
	わからない	28 (12.7)	6 (31.6)	22 (10.9)	
		n = 187	n = 12	n = 175	
小学校就学前の子どもがいる場合の子育て中の仕事の形態 ⁴⁾	仕事を続ける（常勤にて）	40 (21.4)	5 (41.7)	35 (20.0)	0.336
	仕事を続ける（非常勤にて）	34 (18.2)	3 (25.0)	31 (17.7)	1.000
	ある時期仕事から離れ、落ち着き次第復帰する	99 (52.9)	2 (16.7)	97 (55.4)	0.001
	子育てを機に専業主婦になる	10 (5.3)	1 (8.3)	9 (5.1)	0.603
	その他	4 (2.1)	1 (8.3)	3 (1.7)	0.305
中学校以上の子どもがいる場合の子育て中の仕事を希望する機関 ⁴⁾	医療機関	131 (70.1)	6 (50.0)	125 (71.4)	0.009
	研究機関	10 (5.3)	2 (16.7)	8 (4.6)	0.210
	教育機関	11 (5.9)	0 (0.0)	11 (6.3)	—
	行政機関	20 (10.7)	4 (33.3)	16 (9.1)	0.079
	一般企業	8 (4.3)	0 (0.0)	8 (4.6)	—
	その他	7 (3.7)	0 (0.0)	7 (4.0)	—

1) 多肢単一回答を求め、各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

2) 多肢複数回答を求め、各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

3) 多肢単一回答を求め、各項目に該当する者の数および割合を示した。Kruskal Wallis 検定を行った。(n = 220)

4) 将来子どもを持ちたいと思うかの問いに「持ちたい」と回答した者 (n = 187) に対して、多肢単一回答を求め、各項目に該当する者の数および割合を示した。また、該当する有無別に検定を行った。

経歴，大学卒業以降に考えるワークライフバランスに偏りが出ることも十分に考えられる結果となった。そのため，得られた回答者数229人から，「年齢18歳以上25歳以下」，「結婚していない」，「子どもがいない」と

いう選定条件に合致した220人を有効回答とし，分析データとした。

1. 基本属性（表1）

主な基本属性について述べる。性別は，男19人

表3 所属回生にみるワークライフバランスに対する意識差

		人 (%)			
		合計 n = 220	所 属		P
			1 ～ 3 回生 n = 170	4 回生 n = 50	
卒業後進路 ¹⁾	医療系	160 (72.7)	123 (72.4)	37 (74.0)	0.818
	非医療系	60 (27.3)	47 (27.6)	13 (26.0)	
希望する進路における現在の従事者に対して聞いてみたいこと ²⁾	体力的問題	36 (16.4)	31 (18.2)	5 (10.0)	0.196
	労働時間・休暇	115 (52.3)	91 (53.5)	24 (48.0)	0.491
	収 入	61 (27.7)	51 (30.0)	10 (20.0)	0.165
	人間関係	62 (28.2)	40 (23.5)	22 (44.0)	0.005
	結婚・出産・育児	88 (40.0)	68 (40.0)	20 (40.0)	1.000
	仕事とプライベート	53 (24.1)	37 (21.8)	16 (32.0)	0.137
	昇進の機会	13 (5.9)	9 (5.3)	4 (8.0)	0.498
	その他	7 (3.2)	7 (4.1)	0 (0.0)	—
具体的な自分の将来像 ¹⁾	できる限りキャリアを追求し，役職を得る	35 (15.9)	26 (15.3)	9 (18.0)	0.646
	地域に貢献し社会的活動のリーダーとして活躍する	17 (7.7)	12 (7.1)	5 (10.0)	0.547
	仕事とプライベートの両方を大切にする	134 (60.9)	103 (60.6)	31 (62.0)	0.857
	プライベートを最優先する	23 (10.5)	19 (11.2)	4 (8.0)	0.609
	その他	3 (1.4)	3 (1.8)	0 (0.0)	—
	無記入	8 (3.6)	7 (4.1)	1 (2.0)	—
女性が仕事を続けていくために最も必要なもの ¹⁾	育児環境	44 (20.0)	39 (22.9)	5 (10.0)	0.857
	職場環境	65 (29.5)	51 (30.0)	14 (28.0)	0.785
	福利厚生の実	34 (15.5)	24 (14.1)	10 (20.0)	0.312
	配偶者の理解	58 (26.4)	43 (25.3)	15 (30.0)	0.507
	自分の意思	11 (5.0)	8 (4.7)	3 (6.0)	0.716
	その他	3 (1.4)	2 (1.2)	1 (2.0)	—
	無記入	5 (2.3)	3 (1.8)	2 (4.0)	—
将来子どもを持ちたいと思うか ³⁾	持ちたい	187 (85.0)	142 (83.5)	45 (90.0)	0.255
	持ちたくない	5 (2.3)	4 (2.4)	1 (2.0)	
	わからない	28 (12.7)	24 (14.1)	4 (8.0)	
		n = 187	n = 142	n = 45	
小学校就学前の子どもがいる場合の子育て中の仕事の形態 ⁴⁾	仕事を続ける(常勤にて)	40 (21.4)	31 (21.8)	9 (20.0)	0.970
	仕事を続ける(非常勤にて)	34 (18.2)	28 (19.7)	6 (13.3)	0.422
	ある時期仕事から離れ，落ち着き次第復帰する	99 (52.9)	74 (52.1)	25 (62.5)	0.419
	子育てを機に専業主婦になる	10 (5.3)	6 (4.2)	4 (8.9)	0.240
	その他	4 (2.1)	3 (2.1)	1 (2.2)	—
中学校以上の子どもがいる場合の子育て中の仕事を希望する機関 ⁴⁾	医療機関	131 (70.1)	100 (70.4)	31 (68.9)	0.687
	研究機関	10 (5.3)	9 (6.3)	1 (2.2)	0.462
	教育機関	11 (5.9)	8 (5.6)	3 (6.7)	0.716
	行政機関	20 (10.7)	16 (11.3)	4 (8.9)	1.000
	一般企業	8 (4.3)	5 (3.5)	3 (6.7)	0.386
	その他	7 (3.7)	4 (2.8)	3 (6.7)	—

1) 多肢単一回答を求め，各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

2) 多肢複数回答を求め，各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

3) 多肢単一回答を求め，各項目に該当する者の数および割合を示した。Kruskal Wallis 検定を行った。(n = 220)

4) 将来子どもを持ちたいと思うかの問いに「持ちたい」と回答した者 (n = 187) に対して，多肢単一回答を求め，各項目に該当する者の数および割合を示した。また，該当する有無別に検定を行った。

(8.6%), 女201人 (91.4%) であり, 有意差が認められた。所属回生は, 1 回生60人 (27.3%), 2 回生53人 (24.1%), 3 回生57人 (25.9%), 4 回生50人 (22.7%) であり, 有意差は認められなかった。大学卒業後の進路については, 看護師 (交代勤務あり) 125人 (56.8%), 看護師 (交代勤務なし) 3人 (1.4%), 助

産師15人 (6.8%), 保健師17人 (7.7%), 進学25人 (11.4%), 公務員 (保健師以外) 9人 (4.1%), 一般企業15人 (6.8%), その他11人 (5.0%) となった。これを医療系と非医療系に2 値化した結果, 医療系160人 (72.7%), 非医療系60人 (27.3%) という結果が得られ, 有意差が認められた。

表4 卒業後進路にみるワークライフバランスに対する意識差

人 (%)

		合計 n = 220	卒業後進路		P
			医療系 n = 160	非医療系 n = 60	
希望する進路における現在の従事者に対して聞いてみたいこと ²⁾	体力的問題	36 (16.4)	26 (16.3)	10 (16.7)	0.941
	労働時間・休暇	115 (52.3)	89 (55.6)	26 (43.3)	0.104
	収入	61 (27.7)	37 (23.1)	24 (40.0)	0.013
	人間関係	62 (28.2)	47 (29.4)	15 (25.0)	0.521
	結婚・出産・育児	88 (40.0)	70 (43.8)	18 (30.0)	0.064
	仕事とプライベート	53 (24.1)	34 (21.3)	19 (31.7)	0.108
	昇進の機会	13 (5.9)	9 (5.6)	4 (6.7)	0.754
	その他	7 (3.2)	6 (3.8)	1 (1.7)	—
具体的な自分の将来像 ¹⁾	できる限りキャリアを追求し, 役職を得る	35 (15.9)	26 (16.3)	9 (15.0)	0.821
	地域に貢献し社会的活動のリーダーとして活躍する	17 (7.7)	16 (10.0)	1 (1.7)	0.046
	仕事とプライベートの両方を大切にする	134 (60.9)	97 (60.6)	37 (61.7)	0.888
	プライベートを最優先する	23 (10.5)	14 (8.8)	9 (15.0)	0.177
	その他	3 (1.4)	1 (0.6)	2 (3.3)	—
	無記入	8 (3.6)	6 (3.8)	2 (3.3)	—
女性が仕事を続けていくために最も必要なもの ¹⁾	育児環境	44 (20.0)	35 (21.9)	9 (15.0)	0.321
	職場環境	65 (29.5)	45 (28.1)	20 (33.3)	0.451
	福利厚生の充実	34 (15.5)	25 (15.6)	9 (15.0)	0.909
	配偶者の理解	58 (26.4)	46 (28.8)	12 (20.0)	0.190
	自分の意思	11 (5.0)	5 (3.1)	6 (10.0)	0.074
	その他	3 (1.4)	3 (1.9)	0 (0.0)	—
	無記入	5 (2.3)	1 (0.6)	4 (6.7)	—
将来子どもを持ちたいと思うか ³⁾	持ちたい	187 (85.0)	141 (88.1)	46 (76.7)	0.255
	持ちたくない	5 (2.3)	2 (1.3)	3 (5.0)	
	わからない	28 (12.7)	17 (10.6)	11 (18.3)	
		n = 187	n = 141	n = 46	
小学校就学前の子どもがいる場合の子育て中の仕事の形態 ⁴⁾	仕事を続ける (常勤にて)	40 (21.4)	29 (20.6)	11 (23.9)	0.972
	仕事を続ける (非常勤にて)	34 (18.2)	25 (17.7)	9 (19.6)	0.909
	ある時期仕事から離れ, 落ち着き次第復帰する	99 (52.9)	80 (56.7)	19 (41.3)	0.015
	子育てを機に専業主婦になる	10 (5.3)	6 (4.3)	4 (8.7)	0.466
	その他	4 (2.1)	1 (0.7)	3 (6.5)	0.063
中学校以上の子どもがいる場合の子育て中の仕事を希望する機関 ⁴⁾	医療機関	131 (70.1)	115 (81.6)	16 (34.8)	<0.001
	研究機関	10 (5.3)	3 (2.1)	7 (15.2)	0.005
	教育機関	11 (5.9)	5 (3.5)	6 (13.0)	0.074
	行政機関	20 (10.7)	15 (10.6)	5 (10.9)	1.000
	一般企業	8 (4.3)	1 (0.7)	7 (15.2)	—
	その他	7 (3.7)	2 (0.4)	5 (10.9)	—

1) 多肢単一回答を求め, 各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

2) 多肢複数回答を求め, 各項目に該当する者の数および割合を示した。該当する有無別に χ^2 検定あるいは Fisher's exact test を行った。(n = 220)

3) 多肢単一回答を求め, 各項目に該当する者の数および割合を示した。Kruskal Wallis 検定を行った。(n = 220)

4) 将来子どもを持ちたいと思うかの問いに「持ちたい」と回答した者 (n = 187) に対して, 多肢単一回答を求め, 各項目に該当する者の数および割合を示した。また, 該当する有無別に検定を行った。

2. 性別にみるワークライフバランスに対する意識差 (表2)

性別にみるワークライフバランスに対する意識差について検定した結果、「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」について、男性が高値だった項目は、『収入』($p=0.011$)および『昇進の機会』($p=0.017$)であり、女性が高値だった項目は『結婚・出産・育児』($p=0.027$)で、有意差が認められた。

「将来子どもを持ちたいと思う」($p=0.005$)、「小学校就学前の子どもをもった場合の子育て中の仕事」について『ある時期仕事から離れ落ち着き次第復帰する』($p=0.001$)、「中学校以上の子どもをもった場合の子育て中の仕事」の想定場所は『医療機関』($p=0.009$)、「女性が仕事を続けていくために最も必要なもの」は『配偶者の理解』($p=0.029$)の項目で、有意に女性の方が高いという結果が得られた。

他の質問項目に関しては、性別による有意な差は認められなかった。

3. 所属回生別にみるワークライフバランスに対する意識差 (表3)

所属回生別にみるワークライフバランスに対する意識差について検定した結果、「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」の項目のうち『人間関係』については、1～3回生よりも4回生の方が有意に高いことが示された($p=0.005$)。

他の質問項目に関しては、所属回生による有意な差は認められなかった。

4. 大学卒業後に考えている進路(医療系・非医療系)にみるワークライフバランスに対する意識差 (表4, 5)

「大学卒業後に考えている進路」として『医療系』を選択した学生は、「将来従事したいと思っている職業」として『医療機関』($p=0.001$)、「小学校就学前の子どもをもった場合の子育て中の仕事」は『ある時期仕事から離れ落ち着き次第復帰する』($p=0.015$)、「中学校以上の子どもをもった場合の子育て中の仕事」の想定場所は『医療機関』($p=0.001$)、「具体的な自分の将来像」としては『地域に貢献し社会的活動の

リーダーとして活躍する』($p=0.046$)で、有意に高いという結果であった。

一方、「大学卒業後に考えている進路」として『非医療系』を選択した学生は、「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」として『収入』($p=0.013$)、「中学校以上の子どもをもった場合の子育て中の仕事」の想定場所は『研究機関』($p=0.005$)で、有意に高いことが示された。

他の質問項目に関しては、「大学卒業後に考えている進路(医療系・非医療系)」による有意な差は認められなかった。

また、「大学卒業後に考えている進路(医療系)」である学生は、年齢および性別を調整したロジステック回帰分析の結果、回生が1増すごとに、オッズ比1.7倍となった。

考 察

1. 性別にみるワークライフバランスに対する意識差

「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」という質問に対し、男性は女性に比べて『収入』、『昇進の機会』で有意に高い結果が得られた。これより、男性は女性よりもその職場で働く上でどの程度自身が評価されるのか、あるいはどの程度収入が得られるのかといった、仕事により得られる成果に関心があると考えられる。

一方で、「将来子どもを持ちたいと思うか」という質問に対し、女性は男性に比べて『持ちたい』で有意に高い結果が得られた。同時に、「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」という質問に対し、女性は男性に比べ『結婚・出産・育児』で有意に高い結果が得られた。これより、女性は男性よりも将来結婚し家庭をもったときのことを具体的に想像できていると考えられる。女性は、将来結婚し出産・育児といったライフイベントを経てライフステージが進む中で、妻や母親など新たに加わってくる役割を考え、どのように結婚・出産・育児と仕事を両立していくのかという仕事と家庭のバランスに対して関心が高いと考えられる。

「小学校就学前の子どもをもった場合の子育て中の仕事」という質問では、女性は男性に比べ『ある時期仕事から離れ落ち着き次第復帰する』で有意に高い結果が得られた。これより、学生の段階で既に結婚や出産・育児を機に仕事から離れ、子育てが落ち着き次第仕事を再開するという日本女性に特有のM字型就労が意識づけられていると考えられる^{6,7)}。M字型就業の意識について、嘉本による一般女子学生の調査結果では2～3割であるのに比し、本研究の対象のうち女子学生は約5割と高く、さらに卒業後の進路を『医療系』と考えている者にその傾向が有意に高い結果と

表5 卒業後進路(医療系)を従属変数としたロジステック回帰分析

	OR	95%信頼区間 (下限～上限)	p 値
所属回生	1.679	(1.074～2.625)	0.023
年 齢	0.699	(0.497～0.983)	0.040
性 別	0.881	(0.306～2.535)	0.814

1) 卒業後の進路(1=医療系, 0=非医療系)を従属変数とし、所属回生(連続変数)、年齢(連続変数)、性別(1=男性, 0=女性)を独立変数として強制投入し、多変量解析としてロジステック回帰分析を行った。

なったことから、女子学生のうち『医療系』を志望している者にM字型就労の意識づけが高いと考えられる⁸⁾。学生の段階からM字型就業の意識が定着している理由として、本人の価値観や意識によるものと、取り巻く環境によるものの二つに大別できる。

職場環境や労働条件の似た職業に就くことが予想される女性医学生を対象にした意識調査によると、育児期の仕事については、78%の医学生が『子どもをもった場合、常勤または非常勤にて仕事を続けたい』と回答し、看護学生との間に大きな意識差がみられたのに対し、「将来子どもを持ちたいと思うか」の質問には看護学生の87%、医学生の86%が『持ちたい』と回答し、類似した傾向がみられた⁵⁾。これは、看護学生・医学生各々が就こうとしている職業に対する職業イメージの差に起因すると考えられる一方で、実際に育児中に仕事を続けていく際の待遇や制度の差が要因になっていることが考えられる。夜勤や長時間勤務は看護職業務において必要な側面ではあるが、労働時間が短時間である、夜勤をしない職員がいるなど、正規雇用の雇用形態に多様性をもたせることで、育児中にも働き続けられる看護職員が増えるのではないかと考えられる。育児と両立して働ける看護職員が増えることで、看護職不足の軽減に結びつくと考えられる。また、ワークライフバランスの「ライフ」とは「仕事以外の生活」を意味するため、育児や家庭以外の理由から柔軟性のある働き方を選択し、個人の生活を尊重したライフスタイルを選択したいと考えている看護職員にとっても必要であり、多様化した現在のライフスタイルにも合致するのではないかと考えられる。

次に、子どもを持ちたいと思っている85%の人に尋ねた「小学校就学前の子どもがいる場合の子育て中の仕事」という質問に対して、学生の段階で、仕事を続ける意思がある者が約4割(74/187)、子育てが落ち着いた後に復職の意思をもっている者が約5割、合わせると子どもを持ちたいと思う者のうち、約9割が長期的に仕事を続ける意思があることがわかった。また、「中学生以上の子どもがいる場合の子育て中の仕事」という質問に対して、復職先として『医療機関』で働きたいという希望者は、男性より女性が有意に高い結果が得られた。しかしながら、2009年における就業看護師数は約130万人、潜在看護師数は推定65万人であり、時代変遷があるため単純な算出には問題が残るものの、130万人と65万人を加算した195万人を分母とし、65万人を分子として考えられる約3分の1が離職看護師と推定される。逆にいえば、復職も含めて仕事を継続していただける看護師は、約3分の2にとどまっている現状であることが推察される。看護師の人材確保が喫急の問題であるが、特に長期的に仕事を続ける意思がある者、あるいはあった者をターゲット集

団として、実際に復職が実現するよう復職に向けた就労支援策を整えていく必要がある。日常生活で接点をもちそうな場所を中心に広く宣伝し、職歴や専門領域、ブランクの長短など個々に合った支援プログラムを実施するのが理想的である。しかし、実際のところ潜在看護職がどこにどれだけ存在するのかは、国も都道府県も把握しきれないのが現状であり、支援プログラムの内容についても全ての対象者の学習ニーズに 대응することが困難となっていることが就労支援の大きな課題となっている^{9,10)}。そこで、本研究結果から明らかになったように、すでにM字型就労を意識している学生の段階から、復職支援に関する情報窓口の紹介や情報の周知を徹底していくことが有効なアプローチの1つになると考えられる。

2. 所属回生別にみるワークライフバランスに対する意識差

調査期間が10月中だったことから、4回生の多くは卒業後の進路が決まっていた、あるいはある程度の目処がついていたものとして考察した。また、「卒業後の進路」として『医療系』と「将来従事したいと思っている職業」として『医療機関』が有意に関係していたことから、卒業後の進路が、そのまま継続して将来従事したいと思っている職業として想定されていたと考えられる。

「希望する進路にて現役で働いている方に聞いてみたいこと」として『人間関係』と回答した学生は、1～3回生に比べて4回生が有意に高いという結果が得られた。これより、卒業後の進路がより具体的になることで、「聞いてみたいこと」の内容もより具体的になり、結婚・出産・育児といった将来的なことや職場の労働条件というより人間関係といった職場環境の方へと意識が向くようになると考えられる。このことから、進路が決定してから卒業までの期間に、次の進路での実際の情報情報が得られる機会があればよいのではないかと考えられる。

3. 大学卒業後に考えている進路(医療系・非医療系)にみるワークライフバランスに対する意識差

「将来従事したいと思っている職業」という質問に対し『医療機関』、「小学校就学前の子どもをもった場合の子育て中の仕事」という質問に対し『ある時期仕事から離れ落ち着き次第復帰する』、「中学校以上の子どもをもった場合の子育て中の仕事」という質問に対し『医療機関』が非医療系に比べ医療系で有意に高いという結果が得られた。これより、大学卒業後の進路で『医療系』を希望する者は、学生の段階では結婚・出産・育児など現在から大きくライフステージが移り変わっても医療機関(医療系)に従事し続ける意思があると考えられる。

「将来従事したいと思っている職業」では『医療機

関」,「具体的な自分の将来像」では『地域に貢献し社会的活動のリーダーとして活躍する』が非医療系に比べ医療系で有意に高いという結果が得られた。大学卒業後の進路で『医療系』を希望する者は、その後も医療機関に従事することを希望し、将来的には地域に貢献し社会的活動のリーダーとして活躍することを望んでいると考えられる。

また、大学卒業後の進路で『医療系』を希望する学生は、学年進行ごとに講義だけでなく、演習、実習とより実践に類似した学習形態や学習の機会があることで、志望が高まるのではないかと考えられる。一方、『非医療系』を希望する学生にとっては、実践的な機会が増えることで、医療系の進路に対してさらに自分に適応しにくい進路と捉えるのではないかと考える。

4. 本研究の限界

今回の研究は、K大学に在籍する看護学学生を対象としたが、大学卒業後の進路で医療系へ進もうと考えている者が72.7%という結果は、看護学専攻にも関わらず、低いと考えられる。これは、K大学の特徴であるといえるが、一方、一般的な看護学生の意識・選択と捉えるには限界があると考えられる。

また、女子学生91.4%に対し、男子学生8.6%と男女比に大きな差が見られた。よって、性別にみたワークライフバランスに対する意識差から得られた結果は、十分であるとはいいきれない。

結 論

本研究は、看護学生のワークライフバランスおよびキャリア形成に対する考え方を把握することを目的とした。

性別によるワークライフバランスに対する意識差の結果、男性は仕事に関することへ関心があるのに対し、ほとんどの女性は将来新たに加わる役割を考え、その場合の仕事について関心をもっていた。また、小学校就学前の子どもを持った場合の子育て中の仕事について、特に卒業後の進路を医療系と考えている約半数、あるいは女性の約半数は、学生時にM字型就労が既に意識づけられており、出産・育児後復職意思があると考えられる。

以上より、看護職の確保および定着には、就業意思

のある潜在看護職員に対する職場復帰支援の充実や、個々のワークライフバランスに応じた多様な勤務形態の普及が必要であると示唆された。

謝 辞

本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いたK大学医学部看護学専攻の皆様へ心から感謝致します。

なお、本研究は、2010年度京都大学医学部保健学科看護学専攻看護研究をもとに、加筆したものである。

引 用 文 献

- 1) 「ワーク・ライフ・バランス」推進の基本的方向報告—多様性を尊重し仕事と生活が好循環を生む社会に向けて—。平成19年7月男女共同参画会議 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する専門調査会、2007；<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/wlb/pdf/wlb19-7-2.pdf> (2011.10.17)
- 2) 小川 忍：看護職のワークライフバランスの課題、Nursing BUSINESS, 2009；第3巻，第7号：626-630
- 3) 平井さよ子：何のためのワーク・ライフ・バランスか、これからの管理者がめざすこと、看護管理，2008；第18巻，第8号：725-728
- 4) 「第六次看護職員需給見通しに関する検討会」報告書，2005；<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/12/s1226-5.html> (2011.10.17)
- 5) 近藤恵里，野原理子，川上順子，他：ワークライフバランス（仕事と家庭の調和）に関する本学医学部学生の意識調査、東女医大誌，2009；第79巻，第9・10号：386-393
- 6) 厚生労働省，第1回 第7次看護職員需給見通しに関する討論会 看護職職員の需給に関する資料；<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/05/dl/s0522-6b.pdf> (2011.10.17)
- 7) 女性の結婚・出産とM字型就業構造；http://www.jil.go.jp/institute/project/h15-18/07/prs7_04.pdf (2011.10.17)
- 8) 嘉本伊都子：女子学生のライフコース設定と就労意識—2003年度質的社会的調査を通して—、現代社会研究，20004；第7巻，63-81
- 9) 田中幸子，小池智子，坂口千鶴，他：潜在看護師の復職—その実態と支援—、看護展望，2006；第31巻，第11号：1238-1245
- 10) 栗原良子：潜在看護職への職場復帰支援—より効果的な研修の実現に向けて—、看護展望，2006；第31巻，第11号：1251-1255